

## 「毛糸の靴下」

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



今年も沢山の人が亡くなりました。もちろん僕の場合、仕事柄、多くの死に接するわけですが、そういうことを言っているのではなく、皆さんも実感として感じているのと同じ意味で言っています。ここ何年というもの、お亡くなりになる有名人がやたら多いことを皆さんも感じていますよね。この文章を書いている今日は令和6年12月17日ですが、つい最近も、中山美穂さん急死のニュースに驚きましたね。ニュースになるような有名人だけではなく、皆さん自身の身近なところでも、亡くなる人が多い印象がありませんか？僕はあります。前号に詳しく書いた淡路島のおじさんの急死もそうです。

実際、この、「ここ何年かというもの、死ぬ人がとても多い」という私たちの実感は、統計的な数字の実感とも符合します。厚生労働省の人口動態統計によれば、令和6年1～6月の超過死亡は1万7000～4万6000人と推計されているそうです。超過死亡数というのは、高齢化の影響等を考慮しつつ例年の死亡者数に基づいて推測される死亡者数の予測値を上回る死亡者の数です。つまり、超過死亡者数が多いということは、死亡者数が予想を超えて多い、ということですね。コロナ禍が始まって以降、累計の超過死亡者数は何十万人という凄まじい数に達しています。もちろん単なる数ではなく、その一人一人がそれぞれの人生という物語を持った大切な人であり、周りには家族もいます。

コロナ感染で亡くなった人の数では、この超過死亡数の数字は到底説明できません。コロナ対策としてとられた緊急事態宣言等によって活動が制限された家に籠る生活を余儀なくされたり職を失ったり収入が減ったりしたことでも失われた生命もありますが、それも超過死亡数増大の主因にはなりません。コロナ感染者対策で手術が延期されたり救急車や入院の受け入れが滞ったりするなど通常の医療が逼迫し国民の健康が損なわれた、という一面もありますが、これも主因とするには無理があります。とすると、超過死亡数がこんなにも増加した原因はなんですか？コロナバニックが始まってから国策として行われてきたことは何か？それを考えることが、戦争並みかそれ以上の超過死亡数増加の主因を知る一つの手がかりになると僕は思います。それについては各自の推理と判断に委ねたいと思います。ただ、マスコミの言うことや国が推奨することを鵜呑みにしてはいけない、ということをはっきり言っておきたいと思い

ます。〇〇が言っているのだから正しい、と軽率に信じるのは愚かです。〇〇には、政府・テレビ・ラジオ・新聞・専門家・大学教授・医師・ネット記事etc.が入ります。

先月も、ある人の急死の知らせを受け、驚くことができました。水曜日に一緒に仕事をしたTさんが、その2日後の金曜日の夜、旅先のホテルで何の前触れもなく亡くなったのでした。明るく元気で特に持病があったわけでもなく、亡くなる前日の木曜日もいつも通りに仕事をし、「明日から行ってくるね～」と、元気に帰って行ったそうです。

Tさんとは、僕が診ている患者さんの娘として出会いました。Tさんの母親であるフミさんは、僕が訪問診療で入っている施設に入居しておられ、毛糸の靴下を編むのが趣味で、フミさんからは手編みの靴下を何足もいただきました。もう沢山あり過ぎてからいいよ、と言っても次々に編んでは手渡されました。フミさんは、3年前に施設で亡くなりました。91歳でした。その時に、家族として接したのは娘のTさんでした。Tさんは看護師で、その頃は大きな病院の管理職をされていたのですが、その後いくつかの職場を経て、令和6年の春からは、僕が関わりのある施設で働かれるようになりました。Tさんは、小柄でちゃきちゃきしていて悪戯っ子っぽい大きなククリリした目で真っすぐに見つめてくるバキバキと快活にしゃべる明るく元気な看護師さん、そんな印象でした。後から聞いた話では、料理がとても上手で、近所の人や知人友人に手料理を配っていたそうなので、毛糸の靴下を次々に編んでは配っていた母親のフミさんに似ているのでしょうか。

Tさんは、人生最後の日、フミさんに育てられた実家のある稚内に夫と一緒に車で向かい、到着したホテルの大浴場で突然倒れ、救急車で病院に搬送されたけれどそのまま帰らぬ人となりました。遺体は虻田に搬送され、僕もお通夜に出席してきました。福岡から来ていた一人娘に支えられたTさんの夫が泣き崩れていた姿が今でも目に焼き付いています。Tさんは、まだ65歳になったばかりでした。本当に残念な出来事でした。今でも寒い時期には家で履いているフミさんからもらった色とりどりの毛糸の靴下を見る度に、僕は、これからもフミさんとTさんのことを思い出すのだろうか。